

大阪市大家政 ○北浦かほる
中野 迪代

1. はじめに、女子短大生が描く、理想的な将来の住居像を分析、検討することにより、こういった世代の人達がどのような住居観を持っているか、その傾向を探ってみたいと思う。

2. 全体の傾向としては住宅の環境、所有、規模等に関しては、小さくてよい(71.0%)から、郊外(78.1%)に持家(97.0%)を望んでいる者が圧倒的であった。構造ではRC造(63%)、2階建(78.5%)、住戸形態は一戸建(91.5%)、外観の意匠様式は洋風(53.7%)、装備についてはインテリアに重点をおきたい(52.2%)という意見が主流を占めていたが設備に関しては意識が低かった。住生活面では、子供の2人あるサラリーマン家庭(70.0%)を想定しており、親との同居も約半数の者が考えていた。起居様式は椅子座と畳座の混合(86.6%)を望む者が多かった。欲しい室としては、居間と個室に目がむけられ、プライバシー確保の意識も高かった。

3. そこで、住居観を1)自律型、2)誇示型、3)家庭天国型、4)合理主義型、5)慣習型、6)雷同型、7)無関心型の7つの典型的な型に分類し、各人の描いた住居像がこの中のいずれに該当するかを考え、分類してみた。

分類の結果、家庭天国型(42.6%)、合理主義型(36.1%)が主流を占め、全体の志向とも一致している。しかし各人の主観によって分類させた住居観と比べると、自律型が少なくなっており、客観的に判断した結果と多少のずれをみせている。